

制作概要

●「けろけろいけの おしょうがつ」 (1988年初版・学習研究社)

多くの子供たちは、トンネルや迷路図が大好きである。私はかねてより迷路図を長い絵巻物ふうにした絵本の構想をもっていたが、学習研究社から一月号として出版する学研おはなし絵本の制作依頼があったとき、この構想を実現することにした。

私の“蛙シリーズ”絵本が好評だったので蛙たちを主人公にすることが条件であったが、本来自然の蛙たちは一月は冬眠中であり、寒い地上では活躍できないので、土中のトンネルを舞台にして、そこに迷路を加えてみようと考えたのである。絵巻物的な効果を強調するために、脇役であるモグラの掘ったトンネルが次のページに切れ目なくつながるようにし、迷路の場面は観音開きとして、ページの開き方によって子供たちに幾通りもの楽しみ方を与えられるようにした。迷路図を用いた私の唯一の絵本である。

桐 隆一

「迷路の絵本」

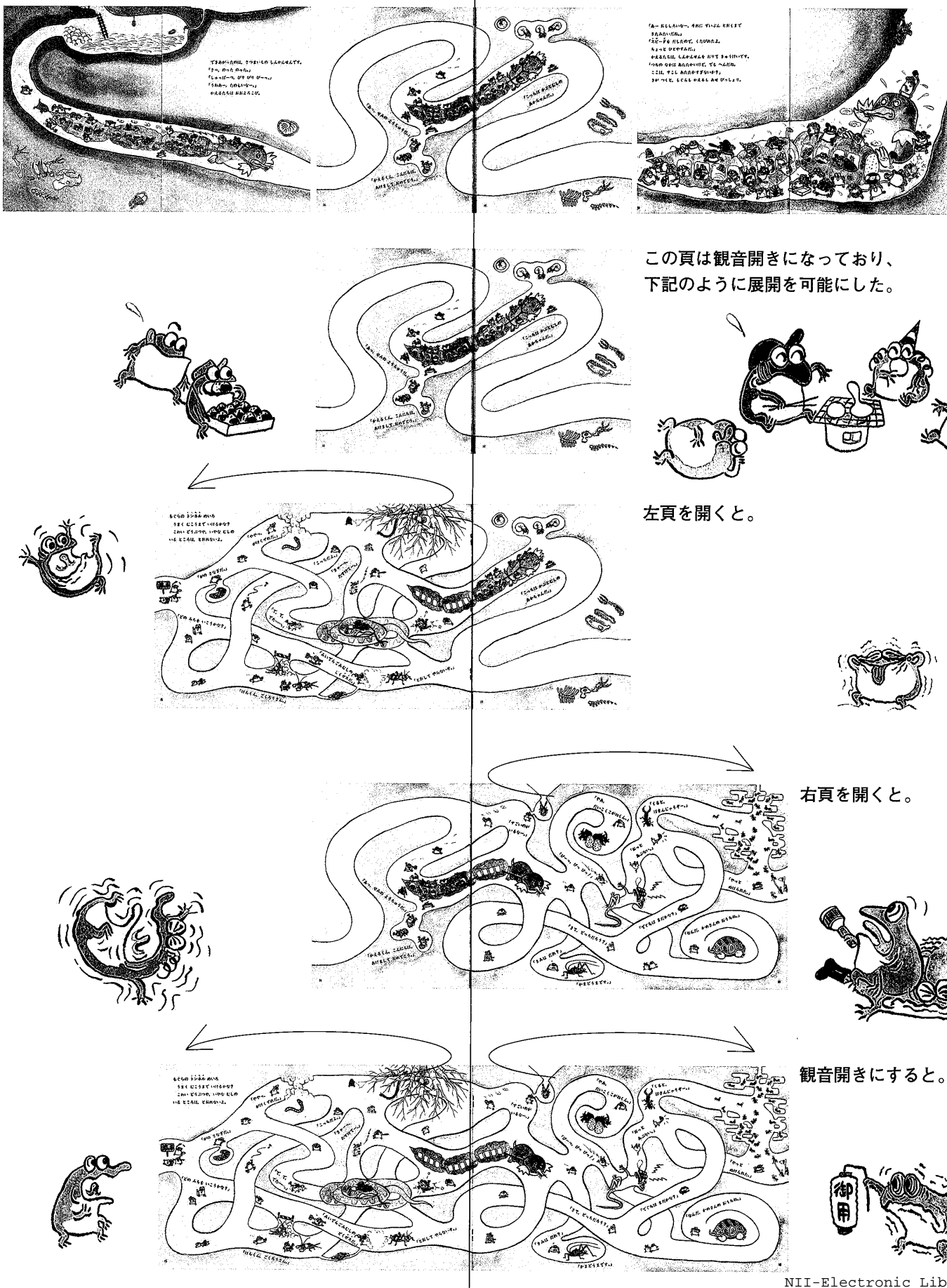
" けろけろいけの おしょうがつ "
" 絵本のためのイラストレーション "

●絵本のためのイラストレーション (未発表作品)

幼い子供たちのための作品であるので迷路の構造は単純でありストーリーもないが、絵巻物的な効果を強調してそれぞれに分岐した道が次のページの道へとつながる。絵本を見る子供たちが、自分が選んだ道をページを開きながらたどって行き、いろいろな障害物や動物たちとの出会いを楽しんでほしいと願いながら描いた試作品である。

「けろけろいけの おしょうがつ」

この絵本は中身（本文）15場面の構成であるが、真ん中の8画面目が横倍寸で描かれて中央に畳み込まれている。迷路の部分には中央に畳まれた中に隠れていて、観音開きによって迷路の全容が現れる。迷路図の中心部分の道は観音閉じしている前ページの中心部分の道とも繋がっているようにしているので、左だけを開いたり右だけ開いたりすることによっても違った迷路図を楽しむことができる。



「絵本のためのイラストレーション」

狭いところから広いところへ・・・、誰しもの心に潜んでいるごく自然な願望だ。

擬人化した蛙たちが小さな池から大きな池へと苦労しながら移動する行程を、連続するひとつの迷路として表わし、途中に岩山や急流、袋小路、障害物となる動物などを幼児にも分かりやすいように配置した。

この絵本のための試作は全部で15場面の構成であるが、意図するところは長い一枚の迷路図なので、各ページの説明は敢えて加えない。ここに15場面のうち10場面を抜粋した。

